

いつの時代にも通用する恵泉の生活園芸

香山 三紀

(短園36回卒 公開講座講師)

Teachings of keisen Jr. College Department of Horticulture Through the Years

KAYAMA Miki

Abstract

For ten years Miki Kayama has been going to Korea to do voluntary service. She helps create gardens, particularly potager gardens at Pulmoo School, which had a long-standing relationship with Keisen Jr. College. This article details her rediscovery of the aims of horticultural education through her experiences working with Korean people. The Pulmoo School and the region surrounding it has helped pioneer of the idea of sustainable agriculture in Korea.

はじめに

私は園芸生活学科を卒業後、1994年に香山園芸装飾士事務所を設立しました。自営業でこれまで造園、庭の手入れ、ベランダなどの花壇管理、プライダル、園芸教室講師など園芸の仕事に携わっております。また、この10年ほどは庭のメンテナンスの仕事を続けながら、恵泉女学園大学公開講座ガーデナー入門講座初級編・中級編の講師をはじめとして、都立高校や東京都公園協会などで園芸教室の講師を勤めてきました¹。

多くの講座を行う中で、受講生たちが求める園芸は生活園芸だということ

1 恵泉女学園大学公開講座、東京都公園協会市民カレッジ、三鷹市、新宿区、戸田市、世田谷区の各自治体での園芸講座、都立高校公開講座、韓国ブルム学校ボランティア講座等

がわかってまいりました。私が恵泉で学んだ花、野菜、果樹の栽培を始め、造園、花壇デザイン、フラワーアレンジメント、ジャム作りなどの食品加工はもとより、恵泉の寮生活で楽しみながら覚えた押し花やキャンドルづくり、クリスマスリース作りなどの手ほどきは、さまざまな講座で大変人気です。また寮生活の行事にあったクリスマスの「ピーさん」やハロウィンなどの話にはとても関心があるようです。

私は恵泉女学園の園芸生活学科で学べたことに大変感謝し、誇りを持っております。できれば多くの人々に恵泉教育の素晴らしさを伝えてゆきたいと考えております。学生時代は問題の多い劣等生で、成績や態度も悪く、しっかりした卒業論文も書けなかった私ですが、なんとか卒業でき、その私を温かく見守ってくださった方々のおかげで今の私がいるのです。キリスト教の教えにある他者との愛ある関係を、寮生活と毎日の礼拝、園芸教育を通して学び、私に生きる自信をつけてくださったのが恵泉教育だったと思います。また卒業生として、恵泉の教育が「恵泉魂」として心と体に沁み込んでいるのを感じる時が多くあります。最近私はこの教育を受けた一人として、何か世の中に恩返しをする年齢に来ているのではないかと考えています。

1. 韓国プルム学園の園芸教育

私はソウルから高速バスで約3時間南に下った韓国中西部、忠清南道洪城郡にあるプルム農業高等技術学校専攻部へ2005年9月から春と秋に年2回、訪問しています。一週間～10日間ほど滞在し、園芸指導のお手伝いをするのが目的です。

プルム学園は1958年のプルム高等公民学校（中学校課程）²の設立に始まります。少人数制の全寮制をとり、デンマークのフォルケ・ホイスコーレ（国民高等学校）の精神と内村鑑三の無教会主義キリスト教の流れをくむ学校で、創立者の理念は「キリスト教の信仰、農村を守る人づくり、世界市民」、現在の校訓は「共に生きる平民」です。正課に農業が取り入れられていますが、1975年当時日本愛農会会長であった小谷純一氏（元愛農高校校長・故人）に

2 現在はプルム高等学校で高校課程の3か年教育を行っている。

より、合鴨農法による稲作が紹介され、そのことをきっかけに有機農業が開始されました。2001年には有機農業の技術をもって就農する若者を育てるため専攻部(2年制)が設けられました³。

プルム学園と恵泉女学園の短大、園芸生活学科は長い交流がありました。恵泉で長く教えられた松井仁・すず子先生、杉山信太郎先生ら無教会キリスト者のつながりにより1985年に宋寅子(ソン・インジャ)さんがプルム学園からの最初の留学生として恵泉に学び、それ以来、恵泉に学んだプルムの卒業生は14名いるそうです。私とプルム学園とのつながりは、寅子さんの同級生であったこと、その後曾恵眞(ソ・ヘジン)さんと園芸生活学科で出会い、恵泉卒業後プルム学園で働いていたヘジンさんに会いに韓国まで行ったことがきっかけです。

プルム学園専攻部では、呉道(オ・ド)さんとヘジンさんの二人が有機農業と生活園芸の指導をしていました⁴。彼女たちは園芸生活学科にあった花園や生活園芸教育を実践しようと頑張っていました。私は何かお手伝いができればと思い、訪問を続けることになりました。

当時プルム学園の校長先生であった洪淳明先生と何度かお会いし、お話を聞く中で、河井道先生の考えた教育理念「聖書・国際・園芸」は「どこの国でも、いつの時代にも通用するものだ」と話されていたことが心に残っています。プルム学園専攻部にも、恵泉で学んだ卒業生の指導のもとで生活園芸を取り入れていきたいと希望を語っておられました。

2. 韓国のガーデニング

2005年に私の訪韓が始まった頃、まだ韓国一般にガーデニングは浸透しておらず、都会の一部の人々がフラワーアレンジメントに興味がある程度で、園芸全般に対してはあまり関心が持たれていない様子でした。しかし、その直後あたりから、韓国の熱心な教育事情に日本で始まった「花育」⁵が重なり、

3 プルム学園専攻部폴무학교전공부 (住所) 충청남도홍성군홍동면운월리 790번지

4 呉道さん:41回生(短期大学専攻科卒業)曾恵眞さん:54回生

5 花育:2009年3月に全国花育活動推進協議会が花卉業界、都市緑化関係の39団体により設立され、学校や地域での花育活動の普及啓発にあたっている。

幼稚園、小学校、中学校などに花育が、医療機関や老人ホーム、福祉施設などには園芸療法が取り入れられるようになりました。家庭や学校での花の栽培や切り花の需要など、一般に向けて花の普及が進む前に、「食の安全」を意識した「食育」に引っ張られるように、「花育」が社会に急に広がったような状況でした。いわば「暮らしに花を」の前に、「花育」、「食の安全」、「心のケア」などが先に来たような印象を受けました。

韓国の教育事情、また社会における犯罪や自殺の問題は、日本以上に深刻な状態が続いています。2008年から呉道さんと市民向けの園芸講座を始めたのは、韓国のこれらの問題に対し、園芸からのアプローチが有効ではないかと話し合ったことがきっかけです。コミュニティガーデン講座、花壇ボランティア養成講座、園芸教室、庭づくり講座、親子で庭づくり講座など、約15年、私が手探りで作り上げてきた園芸講座のノウハウが、韓国でも役に立つのではないかと考えました。これを土台に専攻部の学生を、園芸教室の指導者に育てるような内容も少しずつですがとり入れています。この頃から、ソウルの書店の書架には藤田智先生の本が何冊か韓国語に翻訳されて野菜栽培コーナーに並ぶようになりガーデニングコーナーもできてきました。

現在の韓国の花事情は、2013年に釜山近郊で国際庭園博覧会が開催され、まるで2000年の大阪花の万博の頃のような状況です⁶。ようやく韓国でもガーデニングに関心が向けられるようになってきたように見えます。2014年の春からは園芸の月刊誌も二社から同時に発売されるようになりました⁷。



Garden in 2014年12月号

HP:<http://www.jfpc.or.jp/hanaikukatudoukyougikai> 2014年11月2日最終アクセス

- 6 韓国順天湾国際庭園博覧会 会期:2013年4月20日～10月20日。場所:全羅南道 順天市、豊徳洞、五泉洞など順天湾一体(会場面積約111万平米)。参加23ヶ国、世界83ヶ所の庭園を展示した。
- 7 Garden in(発行元 우리꽃영농조합법인)には呉道さんが「Color in the Garden」を連載している。

3. 韓国の有機農業とプルム学園

プルム学園のある忠清南道洪城(ホンソン)郡は、現在、韓国でも有数の有機農業のメッカとなっています。これはプルム学園の卒業生たちが、卒業後もそこで生計を立て、自立した農民として、農協や生協など地域づくりを進めてきた結果としてよく知られています⁸。この地域は高齢化と人口減少の進む中山間地帯にあって、プルム学園を拠点に地域が一つの有機体となって共同体を作り上げることを目標としてきました。呉道さん達も、そのような生活を実践しています。食材は地域で取れた農産物とその加工工場できた製品(米、穀類、小麦、乳製品など)を近所で購入していますし、フリースクールの試みも始まっています。地域には図書館が建ち、人々の学びと交流の場になっていて、図書館の中には集会所や本屋さんが併設されています。循環型の地域経済をめざし、できることは自分たちの手で作り上げていく生活の実践を目の当たりにして、行くたびに韓国の人々の高い意識に驚かされています。実際このような生活を始めるために、ソウルなど都会の生活をやめてホンソンに移り住む人々もいて、その人たちが持っているIT技術やネットワークなどが村づくりに活用されている場面もあります。

この夏には、恵泉女学園大学の東アジアFSの学生11名が、プルム学園を訪問しました。ちょうど韓国のお盆にあたる9月の連休でしたが、理事長のパク・ワン先生と呉道先生が迎えてくださったと伺っています⁹。恵泉で生活園芸を学んだ学生がプルム学園のような実践の場を訪問することは、意味があることだと思います。特に呉道さんのような恵泉に留学した卒業生が、自分の国に帰ってこのような分野で活躍している姿に触れることは、学生さんたちにとっても、これからの励みになるのではないのでしょうか。

8 坂下明彦ほか『プルム学校を基点とした有機農業の展開と農村協同組合—忠清南道洪城郡—』農経論叢 Vol.66(2011)Mar.pp49-60 参照

9 李泳采先生(国際社会学科)引率の2014東アジアFSは東京新聞11月19日(水)の朝刊で紹介されている。

4. 私の考える「生活園芸」

私が担当する講座の内容を考えると大切にしていることは、実習を通して人々が互いにコミュニケーションをとるきっかけをつくり、人や物の価値に気づきを感じ取れるようにすることです。また受講生一人一人の園芸に対する知識や技術の向上を願うとともに、各人の関心の方向に従って学んだことが社会貢献などにも発展するように考えて行っています。

恵泉で学んだ園芸と生活、これは短期大学の学科名であった「園芸生活」に深く通じていると思います。小さくても楽しいきっかけや心がけを大切に、人との交流に心を開きながら体を使って働くことは、身の回りにあるありふれた小さな命や、隣の人との存在に気づき、その触れ合いによって生まれる喜びや愛という感情によって、心が豊かにされていくものだと思うのです。

韓国に10年間通う中で、洪先生の「河井先生の(恵泉の)教育理念はどこの国でも、いつの時代にも通用する」という言葉に出会ったことは、自分がこれまで続けてきた仕事に自信と励ましを与え、活動を続ける勇気を与えてくれました。

恵泉では卒業式で、卒業生一人一人が「ランタンの灯」をいただきました。そのろうそくの火は光となり、心を暖め、世の中をよき方向に導くというようなお話をいただいたと記憶しております。ランタンの灯は卒業生自身であると思います。小さな個人の活動ではありますが、この活動を通じて、今の韓国の深刻な状況と将来に向けた若い人々の育成のために何か光を当てられればと思っています。

(2014年11月2日)